

* 研究目的

21世紀に入り、大学のありようとその変容が目に見えるようになってきた。しかしながら、その変化に大学側、とりわけ教員の認識が追いつかず、ゆえに変革が遅れているという批判がよく聞かれる。グローバルに大学の格付けがなされるようになった今、われわれ大学教員はどこを見て、何をすればいいのか。その解決の糸口を、今なお未開拓である「大学とメディアとの連携」に見いだそうというのが、本研究の目的である。

* 研究チームメンバーと研究課題

井野瀬久美恵	甲南大学文学部教授	19世紀後半から20世紀初頭にかけて大英帝国が世界各地に発信した情報メディアに関わる思想や概念、制度や枠組みの再考を通じて、新たなメディア連携を考察する。
岡田 元浩	甲南大学経済学部教授	諸々の政治・社会体制の護持もしくは変革にとって、それらに適合する経済思想の大衆への喧伝が鍵を握ることは、卑近な例としては、「小泉改革」などにも如実にあらわれた。今回の研究では、歴代の経済思想がどのようなメディア戦略を通じて普及されようとしていったかを、考察していきたい。
河崎 照行	甲南大学会計大学院・教授	企業のメディア戦略（電子情報開示とCSR）の研究を通して、大学のメディア戦略（大学の社会貢献とメディアのコラボレーション）のあり方について考究する。
胡 金定	甲南大学国際言語文化センター・教授	変化しつつある中国の大学と日本の大学の比較研究をする。また中国の大学と中国のマスメディアとの連携についての現状を調査研究する。
中村 典子	甲南大学国際言語文化センター・	フランス国立視聴覚研究所(INA)

教授

		は、2006年4月から約10万件のアーカイブの音声・映像資料を世界中にネット配信するサービスを始めた(80%は無料)。こうしたフランスのメディア文化事業のあり方を調査すると同時に、フランスの各大学がどのようなメディア戦略を立て、他大学との差別化を図り、特色ある教育を推進し発信しているかを考察し研究する
西田 英一	甲南大学法学部・教授	紛争当事者が問題を定義し、その解決を図ろうとするときの重要資源の一つが「知識」である。誰に何を求めうるのか、そもそもどのような問題なのかといった認知の変容過程として紛争をとらえた上で、日常的なメディア接触が紛争知覚にどう関わっているのかについて考察してみたい。
柳原 初樹	甲南大学言語文化センター・准教授	20世紀のドイツ・ナチズムは映像による宣伝を徹底的に利用し、「メディアによる神話」を創出した。その反省から、戦後ドイツのメディアは、日本に比して歴史認識への責任を過剰なまでに自覚している。そんなドイツと比較しながら、歴史分野の報道における大学とメディアとの連携を考察したい。
渡邊 栄治	甲南大学理工学部・教授	人工的な学習モデルである階層型ニューラルネットワークの学習法と画像処理への応用。メディアに対する受信者のモニタリング手法の開発(挙動や顔の動きから、興味を持って聞いているのか否

かを自動的に判定したい)。